

料紙装飾における唐紙の意匠に関する考察

一瓜文様の系譜一

高橋 静香

本発表は、日本における瓜文様の受容形態とその後の図様の継承を明らかにするため、院政期の料紙装飾にみる唐紙の瓜文様に注目し、その様式の変遷をたどり、イメージの背後にある意味や文脈に解釈を与えつつ、図様の展開を考察するものである。

工芸品における初期の瓜モチーフは、11世紀後半の「粘葉本和漢朗詠集」や「太田切」の唐紙の唐草文に見られる。瓜は他の瑞果と並び、混成唐草文を成している。これらは舶載品であるが、後に和製唐紙に翻刻され「本願寺本三十六人家集」(以下、本願寺本)に登場する。

一方で、同じ頃「寸松庵色紙」の舶載唐紙に、余白を意識した絵画的構成の瓜文が表現されている。更に、本願寺本「素性集」の唐紙には、より写生的表現が加わり絵画性を帯びた瓜文が見られる。これらもまだ舶載品であるが、20~30年後には「金沢本万葉集」に和製唐紙として登場する。

この瓜唐草文と絵画的瓜文という二系統の文様表現が個々に展開していったことは、本願寺本の制作当時、瓜唐草文は既に和製であったのに、「素性集」の絵画的瓜文はまだ舶載品であったことから明らかである。日本国内で瓜唐草文から翻案され瓜文様に展開したものではない。また保安三年(1122)の奥書をもつ「理趣経種子曼陀羅」では、双鳳凰丸・瓜唐草文が復古的なイメージで使用されていることから、瓜唐草文と絵画的瓜文は、文様のイメージまたは意味が異なるものと解釈できる。

ところで、「素性集」の瓜文は、明の呂敬甫筆「瓜虫図巻」の図様に通う。呂敬甫の草虫図は装飾的な美しさを主意としており、その図様は宋代まで遡る。瓜文にみる瓜と蝶の組合せもまた草虫図に由来しており、『詩経』の「瓜瓞綿々」(大小の瓜が蔓を這わせる様子)の瓞と蝶とが同音であるため、吉祥図として花鳥画の画題に登場してきた。北宋末の『宣和画譜』には画題の分類に、山水、花鳥に並んで「蔬果(薬品 草虫付)」という項目が立てられていたことから、草虫図の画題が既に確立されていたことがわかる。また草虫図以外にも、宋代花鳥画の画題には「折枝花図」「夾竹桃花図」「蘆鴨図」などがあり、これらも本願寺本の舶載唐紙の絵画的図様に確認できる。

草虫図の影響を受けた瓜文は和製唐紙のみならず、鏡や陶磁器の文様にもその図様が継承され、新たなモチーフと組合わされ再構成されていく。そして障子や屏風裏などの大画面にも使用され、それに伴い意匠構成も展開する。「寢覚物語絵巻」の画中画障子には、二重線で区画された平行四辺形の枠に瓜文を納めた文様が描かれている。支持体が大画面に移行しても唐草表現に頼ることなく新渡の図様を展開させていったことも、これら二系統の文様に認識の差異があったことを傍証している。

以上、文様の多様化、和様化への過渡期に受容・生産された唐紙の意匠研究が、日本美術における和様化の構造を解き明かす役割の一端を担うことを確信している。